

緒 言

高橋和久

千葉大学大学院医学研究院整形外科

高齢社会を迎えたわが国において、腰部脊柱管狭窄[症]は高齢者の日常生活動作や生活の質を左右する運動器疾患のひとつである。本症に対しては、様々な保存治療が行われるが、それらが無効な場合、手術治療が考慮される。今回、誌上シンポジウム「腰部脊柱管狭窄[症]に対する手術戦略」として、第一線でご活躍の先生方に腰部脊柱管狭窄[症]の手術治療に関する最新のトピックスについて、ご執筆を依頼した。

その結果、中川幸洋先生、吉田宗人先生には「内視鏡下後方除圧術」、二階堂琢也先生、紺野慎一先生には「選択的除圧術」、渡辺航太先生、千葉一裕先生には「腰椎棘突起縦割式椎弓切除術」、大鳥精司先生には「椎弓根スクリュー使用の後側方固定術」、村田泰章先生らには「後方椎体間固定術—椎間孔部での狭窄を伴う腰部脊柱管狭窄症に対する有用性」という題にて論文原稿を頂戴した。大変お忙しい中、ご執筆を賜った先生方に心より御礼申し上げる。

狭い脊柱管に対し椎弓切除を行うことにより、下肢症状が改善することは、20世紀はじめから散発的に報告されていた。しかし、本症の概念を確立し、狭窄症(stenoses)という言葉をはじめて使用したのは、1949年の Verbiest である。わが国へは、1970年に東北大学の若松英吉先生が、自験例13例に基づき本疾患の概念を紹介した。以来、わずか40年余りが経過したに過ぎないが、本疾患はわが国における脊椎手術の中で最も頻度の高いものとなっている。

今日、MRIやCTなどの画像検査の進歩による病態の解明が進み、手術治療もより低侵襲化や病態に即した治療法の開発など、大きな進歩をとげている。本誌上シンポジウムの内容は2011年現在の最新の手術治療である。この度の企画が、読者の皆様の日常診療にお役に立つことを心より願っている。